

保育の現場から

「カメさん、

おはよう！」で

始まった幼稚園

三歳児の保育室にはキンギョとメダカの水槽があり、保育室の前のウッドデッキには大小二匹のカメがいます。入園間もないころ、子どもたちの多くはこうして小動物を近くで何となく眺めたり、餌をやったりして過ごします。ゆつくりヒラヒラと泳ぐキンギョに心を寄せたり、餌をのんびりと食べるカメを見たりして、初めて通う幼稚園の環境に、それぞれのペースで安心して過ごせる場所を見つけていっているのではないかと感じます。三歳児のゆうじろうも、そんな一人でした。

黒川 愛

カメをよりどころにしながら生活する

記録1 四月十六日(月)

入園初日にカメに気づいたゆうじろうは、それ以降、カメの水槽の近くで過ごすことが多い。カメの見える周りで遊び始めようとするのだが、ほかの人が水槽に近づく慌てて水槽に戻る。

たかがカメのことが気になって水槽をのぞきに行くと、ゆうじろうはひじで押して小競り合いが始まる。私が見えに行くと、「まあまあ、ここからでもよく見える

から……」と二人の距離を離す。しばらくしてたくはその場を離れるが、ゆうじろうは水槽の近くに残留。

記録2 四月十八日(水)

ゆうじろうは登園すると、すぐにカメの所に行く。出席シールも貼っていないだったので母親が誘うのだが、水槽から動かず、顔も向けない。私が近づき、「カメは逃げないから大丈夫よ」と言うのだが、「だって、触っちゃダメ!」と言って、自分が気に入っている小さいほうのカメを誰かが触るのではないかと気にしている様子である。私が、近くにいたR先生に「ゆうじろう君ね、カバン直したらすぐに戻ってくるからカメさん見ていてね」と言って、ゆうじろうを抱っこすると、素直に抱かれて支度を済ませる。カバンをロッカーにしまい、慌て過ぎて人につかりながら再び水槽の所に戻る。

記録3 五月八日(火)

朝、私よりもまずはカメにあいさつ。何とか誘って支度を済ませると再び水槽へ……。私がベットシヨップでもらったパンフレットを持って行って開くと、カメの写真

を見て「おんなじね」などと言う。雄と雌との見分け方を私が声を出して読み、五歳児がカメを裏返すのをまねて尻尾の形状を見ている。五歳児が「これはメスだね」と言うと、ゆうじろうも「これはメスね」とまねる。

しばらく後、花壇の近くで数人の子どもとダンゴムシを探していた私は、大きなダンゴムシを見つけた人がいたので「こんなに大きなダンゴムシ見たことない!」などと驚きの声を上げる。ゆうじろうは上履きのまま見に来て、慌ててカメの水槽に戻る。それでもダンゴムシが気になるようで「見たいな」とテラスから言う。私が「外の靴履いてこちらにいらっしやいよ」と言うと、「でもカメが……」と言う。ちらちら気にながら靴を履くとダンゴムシを探している人の所に行く。

おやつの時間になって保育室に戻ると、真つ先にカメの水槽の所に行く。

記録4 五月十日(木)

以前のような朝の慌てた様子もずいぶん落ち着いてきた。ただ、カメのことは気になるようで、支度が終わると水槽に直行する。私はまだゆうじろうとしつかりあい

さつをしていなかったので「ゆうじろうくん、おはようございます。カメさんにもおはようした？」と尋ねる。

ゆうじろうは「誰もカメ触つたらんかった」と言い、

「あのなあ、（誰かがカメを）触つたらダメーって言うんだよ」と言っていたはずらっぽく笑う。私が「そんなに好きなのね。でもみんなでかわいがってあげたらカメさん喜ぶのに」と言うが、その言葉には反応しない。

ゆうじろうにとつてカメとは？

三歳児の多くは、まず「保育者と一緒に」とか「保育者のそばで安心して」といった姿であるのだろうと想像していました。もちろん、保育者を安定のよりどころにして徐々に自分の生活になっていく人もいましたが、ゆうじろうの場合はカメに支えられた部分が大きいと感じました。カメと過ごしたい気持ちの大きさを考えると、それだけ新しい環境に自分の身を置くのに何かにすがったり頼ったりするものがこの時期には必要であったのだと思います。このころのゆうじろうは、幼稚園に遊びに

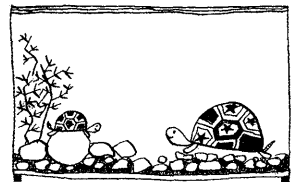
来るとか、先生に会いに来るのではなく、「ぼくのカメ」に会いに来ていたのかもしれない。

外での遊びが展開してくると、ゆうじろうは、そちらも気になり始めました。でも水槽から離れることに躊躇して、行ったり戻ったりし、い

つも上履きは泥だらけでした。五月中ごろになって、やっと朝落ち着いて支度ができるようになり始め、カメとのあいさつが済むと、自分のしたいことへと気持ちと体が向くようになりました。カメと四六時中一緒にいなくても、距離が多少離れても、自分の生活ができるようになってきたのです。

カメを取り巻く面々と

ゆうじろうははじめのころ、カメのことを怖がって見ているだけでした。しかし、大きい人たちが平気でカメを触っているのをじっと見ていたゆうじろうは、周りの



人の接し方をモデルにしなから、カメが危険な動物ではないと知っていくようでした。触れるようになる、今度は誰にも触られないように持ち出したり、時にはカメにとつて残酷とも思えるようなことをしたりし始めました（コンクリートの上でカンナのようにカメを滑らせていたのにはびっくり！）。そのたびに話をし、また、カメの近くに行く人が少なくなってきたからは落ち着いた関係がもてるようになりました。「ぼくのカメ」という言葉は自分とカメとの間でだけ流れる時間を求め、それを誰にも邪魔されたくないと願う気持ちの表れだったのかもかもしれません。そのうち幼稚園での生活が見え始め、自分の興味が広がり、カメと自分だけではない世界を模索し始めているように見えました。

再びカメと…

その後のゆうじろうは、生き物にとっても興味をもち、生き物が大好きなれおと引き寄せられるようにくつつき、毎日網を持っては園庭の隅から隅まで行くようになって

りました。また、五歳児にくつついていろいろなことを教えてもらい、刺激も受けたようです。実ははじめのころ、ゆうじろうはほかの人が捕まえた虫が入っている飼育ケースもお構いなく触つて、五歳児にしかられ、泣いたことも何度かありました。そうした経験や、大きい人のたくましく生き物とかかわる姿に触れて、ゆうじろうの虫に対する思いや知識などはさらに広がってきたようでした。

二学期になり、赤トンボが悠々と飛び始めたころ、私は、少し戸惑うことに会いました。

記録5 九月十八日（火）

うれしそうにゆうじろうが「アイせんせい、トンボ！」と赤トンボを見せる。「わー、すごい、飛ぶの速いだろうによく捕まえたわねー」と感心して言うのと、「これで捕まえた」と網を見せる。飼育ケースに入れたトンボはジツとしているのだが、ゆうじろうが触ると時どき羽をばたつかせる。ゆうじろうは、また飼育ケースを持って走って行く。

帰りの集いが始まるころ、カメの水槽をのぞき込んで
いるゆうじろうの姿が見えた。何を見ているのかなど、
何の気なしに私も近づいてみる。すぐ横には、トンボが
入っていた飼育ケースのふたが開けられたまま置いてあ
る。水槽をのぞくと、カメが先程のトンボをくわえて、
すごい勢いで食べているところだった。私が驚いてゆう
じろうの顔を見ると、ゆうじろうも何も言わずに驚いた
顔をこちらに向ける。少しの沈黙の後に、「カメさん喜
んでいるけど……何だか私、悲しい気持ちになつてきた
……。ゆうじろう君はどんな気持ち？」と尋ねると、「悲
しい気持ち……」と言う。「さ、お帰り始まるから行こう
か」と言うと、黙って私についてくる。

実はどうしてトンボをカメに食べさせたのか気になっ
て半月後に本人に尋ねてみました。次の記録はそのとき
の会話です。

記録6 十月三日(水)

私が「ねえ、この間トンボをカメにあげたよね」と言う
と、「うん」とゆうじろうが言う。「あのとき、どんな気

持ちだったの？」の問いに「嫌だった」と言う。「何
で？」「だって食べるんだもん」。さらに私が「だってあ
げたのはゆうじろう君でしょ」と言うと、「こうやって
ら(口の近くに手を持っていった) ホントに食べた」と
言う。私が「もしかして食べるかどうかやってみた
の？」と尋ねると、「うん」と返事をする。私が「そっ
かあ、そうだったんだ……。実はどうしてだろうなあって
気になってたんだ」と言うと、返事をしないで立ち上
り、「池に行こう」と私に言う。

カメがトンボを食べたとき、私は何を言おうか、それ
とも何も言わないでおくべきか、どうしたらよいのか迷
いました。実は今でもわかりません。トンボがカメの食
料になることは当然起こることで、それはそれで私は受
け入れられるのですが、どうしても「私は悲しい」の言
葉になってしまいました。そのときのカメは、日ごろ子
どもたちと与えている人工的な餌を食べるカメとはどこ
か違う、生命力が満ち溢れたような印象を受けました。

気持ちよくなるほど堂々とした食べっぷりに、その生命力をぶつけられたような複雑な気持ちになって目が離せなくなりました。

カメの口から弱々しく出ている羽を見たからでしょう。その姿を見つめるゆうじろうは驚いているようにも、怖がっているようにも見え、おもしろがっているようにも思えませんでした。ゆうじろうに何かひとこと言いたくなって出たのが、「私は悲しい」という言葉でした。今思うと、私は、トンボが食べられて悲しいのではなく、悲しい顔をしているように見えるゆうじろうのことが悲しかったのかもしれない。

ずいぶん日がたってから尋ねたのに、そのことを覚えていたこと、また自分の気持ちを言葉で私に伝えてくれたことに驚きました。それだけゆうじろうにとつても強烈な出来事だったのではないかと推測されます。結果的に、トンボを目の前にちらつかせてみたら、たまたまカメが食べてしまったということではないでしょうか。大

人から見たら少々残酷に見えるかもしれないし、生き物に対しては申し訳ない気持ちになります。しかし、ゆうじろうが出会った数々の生き物たちは、生きていく生命力の素晴らしさも、命を頂くことのありがたさも、それから悲しさも教えてくれるものであったのではないのでしょうか。

「先生来たよ」よりも「カメさん来たよ」で始まったゆうじろうの幼稚園生活。今振り返ってみると、ゆうじろうが、カメを支えとして幼稚園に慣れたのだとわかります。そして、どんな生き物がいるのかと幼稚園中を探し回って知っていくにつれて、ゆうじろうが安心して生活できる場が広がっていつていっていいようでした。そういう力が生き物にはありますし、そんな出合いをゆうじろうは自分でつくってきたのだと思います。その姿を私はどう受け止めて、どうかかわっていくのか子どもたちと模索していきたいです。

(山口大学教育学部附属幼稚園)